

# 観光文化

Tourism & Culture



財団法人日本交通公社

## 特集◎ 愛しの富士山

### ◆巻頭言

富士山 ときめき 無限大 ロッキー田中……①

### ◆特集

- 富士山世界文化遺産登録を目指して  
— 富士山に育まれた信仰の歴史 清雲俊元……②
- 「富士山の美術」の変容 — 山梨県立美術館・  
特別展「富士山—近代に展開した日本の象徴」から シンボル 平林 彰/和田佐知子……⑥
- 「観光立県しずおか」の空の玄関口「富士山静岡空港」の開港  
— 静岡県の「観光新時代」に向けて 出野 勉……⑩
- 広域連携による国際観光振興  
— 富士箱根伊豆国際観光テーマ地区の場合 古谷健一郎……⑭
- 富士山の自然の魅力と価値を語り伝える 渡辺長敬……⑰

### ◆連載

I あの町この町 第30回

赤鬼の見張り — 長野県・大町市 池内 紀……⑳

II 風土燦々③

孤島の相撲大会（後編）— 鳥根県隠岐の島町 飯田辰彦……㉔

III ホスピタリティーの手触り 51

観光と宗教 山口由美……㉙

◆新着図書紹介……㉚



## —— 西湖いやしの里・根場 ——

富士山とかやぶき集落の組み合わせは実に美しい。この光景を眺めていると、まるで映画のセットではないかという錯覚すら覚える。写真は山梨県富士河口湖町西湖畔にあるいやしの里・根場の風景である。西湖と青木ヶ原樹海、そして富士山の絶景はもう一つの観光名所として注目されている。

だが、この穏やかな集落には悲劇の歴史があった。一九六六年の台風による土石流が四十数戸のかやぶき集落を一瞬にしてのみ込む大被害が発生した。

今でこそ再生にこぎ着けたが、復元するまでに三十八年という歳月を要した。二〇〇四年から現在までに十五棟を建造し、最終的には二十棟以上のかやぶき集落を完成させる。個々の建物で、そば打ちやほうとう作り、ザルや陶芸、木地・紙すき、絹織りなどの郷土工芸の体験のほか、資料館やギャラリーでの見学、地場の土産物などをそろえ、旅人たちの交流の場として、各地から観光客を集めるまでになった。復活したかやぶき民家がこれからまぶしく輝き続けてほしい。

(写真・文 樋口健一)



〈蒼き山嶺〉雲海が引いて谷に霞が残る。青から白へ、そして蒼への色墨絵だ

古来より、怒り荒ぶり裾野を広げ、美しく調和する神の山。勇気をくれて志を高め、いつも励ましてくれる無限の大きな存在。富士山は日本人の心情そのものと言ってもよいと思います。何故富士山が古来より神山とされ、かくも日本人の魂を揺さぶるのか。それは奇跡を起こしてくれている事実があるからです。

日本人の一番好きな富士山は、自分の住んでいる場所から見る富士山です。富士山の見える県に住んでいる人には入院するような病気は少ないともいわれます。新幹線や飛行機から富士山が見えると得した気分になります。山の見える県に育ち、他県に働きに出ている、あるいは海外旅行

## 富士山 ときめき 無限大

写真家 ロッキー 田中

をして帰ってきた時に真っ先に探すのは富士山です。それは日本人のDNAに刻まれています。

富士山が見えてうれしい！得した！という気持ちは心の波動を高めます。心が明るくなることで会話も他人への接し方も変わります。ちょっとした出来事も良く受け止めることで事態は好転するし、あれほど悩んでいたことも、いつの間にか通り越していたりします。劇的な幸運ではなく大難を小難に、小難を無難に。それが奇跡です。いわば富士山を身近に感じることで心が軽くなり、自らが好転させていくのだと思います。また、富士山のようになりたいという志も自らを高めることに直結しています。

人々の富士山に寄せる思い、私はそれを「ときめきの富士」と名付け、天職にすることができました。山岳写真ではなく人々の心に共鳴する富士山、それは浮世絵のような情感に満ちて優しくかつ力強く包み込んでくれる「ときめきの富士」です。

探していた富士山を見つけ、喜ばれて、いい顔になっていただく、そのご褒美にご飯まで食べさせていただく世界でたった一つの仕事。今私はプロとしての職責を果たしているという実感と感謝に満たされています。

富士山のお陰

みんなのお陰

感謝無限大

# 愛しの富士山

日本一の山・富士山。高さ、美しさ、その雄姿は、古代より日本人から愛され親しまれ、畏敬の念をもってあがめられてきた。現在、世界文化遺産登録に向けた取り組みも開始され、昨年一月には世界遺産暫定リストに登録された。今号では、信仰の歴史、近代美術史、自然環境、観光交流の視点から、富士山の存在価値とその魅力を紹介する。

特集 1

## 富士山世界文化遺産登録を目指して

### ——富士山に育まれた信仰の歴史

放光寺 長老  
富士山世界文化遺産山梨県学術委員会 委員長 清雲 俊元

はじめに

富士山は古来より霊峰富士として聞こえ、日本一の高さを誇る山である。その秀麗な姿からさまざまな崇拜や信仰の対象となり、また優れた文学・芸術作品の主題となるなど、日本文化の源となってきた。日本人の宝である富士山を人類共通の財産とするため、世界文化遺産登録を目指している。平成十九年（二〇〇七年）一月にユネスコ世界遺産委員会において暫定リストに登録

された。現在登録に向けて、山梨・静岡両県および関係市町村では、「世界文化遺産としての富士山の価値」について文化的・歴史的な構成資産の価値の検討が進められている。古代から現代に至るまで、富士山と人のかかわりを見る時に、山そのものがない時代のあっても信仰の対象であり、遙拝の山であるとともに登拝の山であり、世界でもまれな霊峰であることがわかる。富士山と人々のかかわり、信仰の歴史について簡単にまとめてみた。

### 遙拝の山・富士山

奈良時代末期から平安時代にかけて、富士山の火山活動は史料に残されたもので十数回の噴火の記録がある。延暦十九年（八〇〇年）・貞観六年（八六四年）・宝永四年（一七〇七年）の活動が三大噴火といわれている。奈良時代『万葉集』の中で高橋虫麻呂は、富士山は日本の象徴であるとともに「神の山」と詠んでいる。こうした敬虔な自然崇拜はさらに遠く太古にまでさか

のぼる。静岡県富士宮市の千居遺跡(縄文時代中期)では、富士山に向かって一直線に延びる配石遺構が検出された。その長さは四十メートル余にも達し、富士山の遙拝祭祀の場と考えられている。富士山は噴火を繰り返し、岩を押し出し、灰を降らし続けた。

富士山周辺に暮らす人々は、富士山をあがめるだけでなく山神の怒りを鎮めたい願いが込められ信仰が生まれた。

八世紀の後半になると富士山の噴火の様子が記事として見られるようになった。『続日本紀』の天応元年(七八一年)七月六日条が最も古い。その記述は「駿河国言す富士山の下に灰を雨らす。灰の及ぶ所は、木葉彫萎す」と簡単な記事がある。

古く「福慈神」と称された(『常陸国風土記』)神はいつしか「浅間神」(浅間明神)と呼称されるようになる。延暦二十一年(八〇二年)までは、その噴火を都へ注進するに際し「富士山」と称し用いていた(『日本紀略』前篇二三)駿河国が、貞観六年の報告では「富士郡の正三位浅間大神の大山」と記しているのは象徴的である(『日本三代実録』巻八)。噴火活動が活発になり九世紀の前半、律令国家の手により富士山を神体

とする浅間神が祭祀されることが許されるようになる。これが現在の富士山本宮浅間神社(静岡県富士宮市)である。これは大同元年(八〇六年)に坂上田村麻呂が社殿を造営したといわれる「富士本宮浅間社記」(『浅間文書纂』所収)の記載にもある。

仁寿三年(八五三年)七月、浅間神は「名神」に列した。また、同月中に従三位、さらに貞観元年(八五九年)には正三位の位階をそれぞれ与えられた。これらは、荒ぶる神を鎮めるため繰り返し叙位を与えたことになる。

こうしたなか、貞観六年、富士山は大規模な噴火を起こした。長尾山をはじめとする北西麓の側火山から噴火した溶岩流は、甲斐国八代郡に甚大な被害を及ぼした。本栖、菱の両湖を埋め、さらに河口湖にまで迫った。湖水は魚類や亀類が死滅し、人々の居宅も多くがつぶれたほか、住人の避難により主を失った住居が続出したと伝えられる(『日本三代実録』巻九)。この噴火の原因を亀卜に探った朝廷は禰宜・祝による明神祭祀の怠慢を問題視し、甲斐の国司に対しても翌貞観七年(八六五年)十二月には甲斐国八代郡に浅間明神の社殿を建てて官社に列するとともに禰宜・祝を置いて時

に応じて祭祀を行うよう求めたのである。このとき創建された神社については諸説あるが、富士河口湖町河口の浅間神社ではないかともいう。程なく山梨郡にも浅間明神が祭られたが、これが後の甲斐国一宮となる笛吹市一宮町の浅間神社とみられる。

駿河と甲斐の両国において浅間明神を手厚く祭祀することで、ひとえに火山活動の終息を祈念したのである。幸いにも、宝永四年の南東斜面の噴火まで大きな噴火はなかった。

## 修験の行場

永保三年(一〇八三年)を最後に富士山噴火活動は休止期に入る(『扶桑略記』)。富士山を舞台にした修験の活動が記録されるのも、このころからである。ここに修験の開祖と仰がれた役行者などの登拝伝承が生まれてきた。特に縁起や記録に名をとどめる修験として『本朝世紀』に富士へ登ると数百度、山頂に大日寺を構えて富士上人と呼ばれた村上修験の末代の名が最も著名である。このころ大宮・村山口登山道が開かれた。末代は幼少のころ、伊豆国走湯山(現在の熱海市の伊豆山神社)で行者として修行を重ね、天承二年(一一三二年)二十八歳

で初登頂に成功した。久安五年(一二四九年)一切経の書写と富士山への埋納を企画し、関東から東海・東山の衆庶を勧化し、さらには鳥羽法皇の結縁を獲得したとも伝えられている。末代のあと、その流れをくみ富士山で修行者が多く、村山の地が富士修験の拠点となった。文保年間(一二二七―一九年)には頼尊が山中の一字を村山に移し浅間神社の前身である興法寺を開いた。文明十四年(一四八二年)に聖護院本山派に属した。

室町時代に入ると一般の登山の登拝者も増加し、村山三坊(辻之坊・池西坊・大鏡坊)などの道者坊が発達した。

村山修験にあつては末代の時から神仏習合をとなえ富士浅間大菩薩の本地は大日如来と称し、山頂の火口と八峰は胎蔵界曼荼羅の八葉九尊に見立てた。富士山には多くの大日如来が祭られたが一番古い像は、村山修験の拠点であつた村山浅間神社(静岡県富士宮市)に祭られる正嘉三年(一二五九年)造立の胎蔵界の大日如来像である。村山浅間神社にはほかに文明十年(一四七八年)造立の金剛界の大日如来も安置され、その後江戸時代の中ころまで多くの大日如来が山中に造立されるが、そのほかにも

大日如来の教令輪身といわれる不動明王をはじめさまざまな仏像が当時の修験らによつて勧請され、富士山全山が曼荼羅世界を具現化したものと考えられていた。富士山本宮浅間大社蔵の『富士曼荼羅図』(重要文化財)を見ると富士山に宿る神・浅間大神の本地仏は大日如来であり、山頂の峰々には大日如来ほか阿弥陀如来と薬師如来が現れ神仏習合の思想を表している。

南面の村山に対し、北面の修験の拠点となつてるのが二合目の御室浅間神社である。同所に鎮座する浅間明神は甲斐側で最初に勧請された社と伝えられてきた(『甲斐国志』巻七一)。この神社には文治五年(一一八九年)と建久三年(一一九二年)の紀年銘のある日本武尊と女神の二像が伝わっていたという。両像ともに走湯山の覚実・覚台坊により造立されており(『甲斐国志』巻七)北面の開創にも伊豆山修験が関与している。富士北麓と甲斐国の中心となる甲府盆地の間には、御坂山地が横たわっている。この御坂峠には盆地側の中間点に役行者像を祭る堂宇があつた(『甲斐国志』巻二四)。祭祀を司つたのは大善寺(甲州市勝沼町)で同寺に現存する役行者像(山梨県指定文化財)であつたと伝承される(『甲斐国志』巻七五)。また甲府市中道町の円楽寺は役行者による創建と伝えられ、かつては二合目御室に行者堂を所持していた(『甲斐国志』巻八〇ほか)。同寺に伝存する二世紀末期の作と推定される役行者像(山梨県指定文化財)はこの御室の行者堂に安置されていたと伝えられる。大善寺や円楽寺は、ともに甲府盆地を代表する修験の寺院であり、盆地から御坂山地、さらに富士山への回峰巡拝の存在が想定される。

## 富士講の隆盛

戦国時代の末期に現れた長谷川角行は修験者の一人で、この世と人間の生みの親は、もとのちち・はは、すなわち富士山が根本の神であるとし、江戸とその周辺の庶民の現世利益に应运えて人々を救う近世富士講の教義を唱えた。

正保三年(一六四六年)に百六歳で人穴(富士宮市)で死んだというのがその信仰は弟子たちに伝えられ、さらに村上光清の光清一派と、食身身祿の身祿派の二派に分かれた。光清は財力によつて身祿派を圧倒したので、吉田では「乞食身祿に大名光清」と言つたという。身祿は世直しを願つて享保十八年

(一七三三年)に富士山吉田口七合五勺の烏帽子岩で断食行に入り入定した。それに従ったのが田辺十郎右衛門である。このことが江戸の人々に伝わり富士山霊に帰依する身祿の信徒が増大した。

特に身祿は入定にあたって信徒の登山本道を北口と定め、吉田の御師坊を山もとの拠点とした。それからは身祿派が優勢となり発展していくことになる。

江戸時代中期、江戸市中を中心に関東一円に「富士講」が蔓延したという。特に江戸八百八町に八百八講といわれるほどの数多くの講があり、これらの富士講道者の登拝口として北口本宮富士浅間神社のある吉田口のほか富士浅間社を起点とする須走口登山道や須山浅間神社からの須山口登山道も関東からの富士講信者により利用された。特に吉田口には御師宿坊が繁栄し、全盛期には宿坊七十軒が軒を連ねたという。

## 富士の女神像

富士山は神の山であるとともに女神であることは往古から言い伝えられてきたが、資料としては一四世紀ころに書写された『富士縁起』(称名寺伝本、金沢文庫蔵)に「富

士浅間大明神は天女」とある。また、女神像としては『甲斐国志』に二合目御室浅間神社に建久三年造立の日本武尊・女神像を走湯山の修験によって勧請した記事が最も古い。

また忍野村忍草の浅間神社には正和四年(一二二五年)丹波の仏師・静存の造立した女神像・鷹飼・犬飼の三像(重要文化財)が現存している。この神像の類型として現在伊豆山神社に明徳五年(一二九四年)に走湯山大仏師・周慶が造立した男神像・女神像の二体が伝わっている。これらの女神像は富士浅間大明神の祭神と考えられ、その他に村山浅間神社の正嘉三年(一二五九年)の胎藏界大日如来像も女神を意識した本地仏像と考えられる。これらの女神像は走湯山ならびに村山修験によって広められたものである。さらに平安時代にできた『竹取物語』の中でかくや姫と富士の神が結びついた説話が種々の「富士山縁起」の中に散見される。また一四世紀成立の『神道集』にも富士浅間大菩薩はかくや姫とその恋人の国司であると女神像のことが記載されている(『富士の神仏』富士吉田市歴史民俗博物館企画展)。現在の多くの浅間神社の祭神は「木花咲耶姫命」(木花之開耶姫)と呼称されている。

この神は『古事記』『日本書紀』に登場するが、富士山の祭神としての記事は古くは見られない。木花咲耶姫が浅間神社の祭神としての初見は慶長十九年(一六四四年)の『集雲和尚遺稿』の中に「この神は木花開耶姫。天津彦瓊々杵尊の妻なり。浅間神。開耶姫の御子三人あり。云々」とあるが、近世に入ってから浅間神社の祭神として木花咲耶姫が登場して今日に至っている(『富士山の精神史』竹谷朝負著)。このように神名が変わったのは旧来の本地垂迹説を排して国学者によって廃仏毀釈運動が盛んになった江戸中期以降、幕末になつて本格的に改められていったのである。

## むすび

明治初年の神仏分離令により山中の仏像・仏具は下山または廃棄された。仏教施設はすべて取り除かれ、神道の施設に再編された。明治七年(一八七四年)には富士山中の仏教的な地名も改称された。

富士山は古代から現代に至るまで信仰の形態は変わってきたが、いつもその時代の人々の信仰の対象であり、老若男女を問わず憧れ親しむ山として、多くの人々が山頂を目指している。(きよくも しゅんげん)

# 「富士山の美術」の変容

——山梨県立美術館・特別展「富士山—近代に展開した日本の象徴」から

山梨県立美術館学芸員

平林 彰／和田 佐知子

二〇〇八年に山梨県立美術館は開館三十周年を迎え、六月から約一カ月間、特別展「富士山 近代に展開した日本の象徴（シンボル）」を開催しました。長く日本のシンボルとして君臨してきた富士山。山梨県では、富士山の世界文化遺産登録を目指してさまざまな取り組みを行っていますが、本展もそうした動きの中で、富士山の文化的意義を検証するために企画されました。そして、どのような時代や視点で作品を取り上げることが当館の特別展としてふさわしいか、議論を重ねました。その結果、明治以降の美術にポイントを絞り、近代化の流れに照らし合わせて、富士山に託された意味や役割を明らかにすることを目的に据えることになりました。富士山に対して抱くイメージは、人さまざまです。その多義的で広範なイメージを整理し、二一世紀の富

士山像へつながらる問題提起の場になればという期待も伴っています。もちろん本展ですべての美術を網羅するには限界がありましたが、選び抜いた作品から富士山をめぐる複層的な断面が理解されたと思います。

さて、会場で展観していただいた順に本展を紹介していきます。

\*

展覧会は三つの章から構成されました。まず第一章は「近代富士の兆し」です。現代の日本人が「富士山の美術といえど何か？」と問われれば、葛飾北斎《富嶽三十六景》を挙げる人は少なくないだろうという発想から始まります。日本を代表する世界的な画家・北斎。その代表作となれば当然でしょうが、実は、こうした評価は近代になって定着したもののなのです。もちろん北斎は当時から人気の浮世絵師であり、

展覧会は三つの章から構成されました。まず第一章は「近代富士の兆し」です。現代の日本人が「富士山の美術といえど何か？」と問われれば、葛飾北斎《富嶽三十六景》を挙げる人は少なくないだろうという発想から始まります。日本を代表する世界的な画家・北斎。その代表作となれば当然でしょうが、実は、こうした評価は近代になって定着したもののなのです。もちろん北斎は当時から人気の浮世絵師であり、



展覧会チラシ

《富嶽三十六景》は大ヒットシリーズでした。しかし「世界的な画家」の「代表的な作品」という認識は、西洋における日本趣味の流行、すなわちジャポニスムによって、明治以降、浮世絵を高く評価する価値基準が逆輸入されてからのことでした。とはいえ本展の趣旨は、そうした価値基準の再考察にあるのではなく、《富嶽三十六景》＝「代表的な富士山の絵画」という概念が日本人に浸透するまでの富士山像の変遷を見極めるこ





葛飾北斎《凱風快晴》山梨県立博物館蔵

とにあります。また、その実践者であり継承者でもあった芸術家たちの苦闘の産物として、新たに富士山の美術が誕生し続ける事実を認識することになりました。北斎の活躍した江戸時代、さまざまな流派が誕生し、個性豊かな絵師たちが富士山を描いていますが、本展の始まりとなる第一章では、北斎と比肩する歌川広重をはじめ、一九世紀に描かれた富士山の絵画を紹介しました。それらには、伝統を踏襲した富士山があれば、それに対して新たに西洋画の影響を受け、近代

の兆しを見せる富士山と、さまざまな様相を呈しています。

続いて第二章では「近代の富士」として、明治以降、第二次世界大戦までの時代に見られる富士山の美術を二つのセクションに分類しました。まずは「新しい風景画の展開」として、近代において一層多様化した姿で表現された富士山を代表的な画家の作品から紹介しました。近代日本画の中で欠くことのできないのは富岡鉄斎と横山大観でしょう。最後の文人 鉄斎は、生涯で一度だけ富士登山を行っています。以来、その感動を胸中に数多くの富士山を描き、それらは後に蓬莱山とイメージが重なり、まさに理想郷として出現しています。一方、大観は、富士山に登ることはありませんでしたが、伝統的な絵画様式を学んだ上で、千変万化する富士山の諸相を捉え、さらには時代思想も取り入れた富士山を生み出しています。生涯に千五百点以上描いたとされるそれら主題の変遷と作風の変容は、まさに時代を映す青写真としての側面を持ち合わせています。

洋画においては、画家たちが本格的に西洋画の技法を学び、洋画家としての地位が確立されていく中で描かれました。初めは名所風

景の一つに過ぎませんでした。和田英作や岡田三郎助、吉田博らの登場によって、写生に基づいて人念に構想を重ね、自らの感性による富士山像として描かれるようになったのです。

二つ目のセクションは「イメージの流出・消費される富士」と題し、明治・大正期に富士山がどのように描かれ、受容されたのか、富士山が包含する意味とその社会的役割に注目しました。幕末以来、異国との交流が盛んになった日本では、外国人へ向けて日本文化を紹介するための製品が次々と生み出されました。それらは文化を通じて欧米諸国に「日本らしさ」を強調するための手段でもあり、富士山をはじめ、花鳥風月などいわゆる日本的な意匠を前面に押し出したモチーフが意図的に選択されます。殊に殖産興業を掲げた明治政府は、当時世界各地で開催された万国博覧会に、重要な輸出品として数多くの工芸品を出品しています。その装飾には日本の象徴として富士山が多用されました。一方、一八五九年(安政六年)に開港した横浜では、外国人向けのお土産として「横浜絵」と呼ばれる浮世絵や絵画が人気を博しました。これらは背景に富士山を配し、侍や町娘、人力車など「日本的」なイメージを寄せ集めた

「絵になる絵」として描かれています。明治、大正と、工芸品や商品パッケージなどを介して、富士山のイメージは世界に向けて発信され、国内外を問わず消費されていったのです。私たちにとって見慣れた富士山のイメージが、実は歴史的文脈の中で巧妙につくられたことが分かります。

一方、昭和の富士山像を検証する上で避けて通れないのが、戦時下における「国威発揚」のシンボルとしての役割です。それまで、外国に向けてアピールされていた「富士山＝日本」という図式から一転、富士山は国体の象徴と見なされ、国家的なレベルはもろろんのこと、民衆レベルにおいてもさまざまな場面で登場するようになります。一九四〇年（昭和十五年）には、神武天皇の即位二千六百年を祝した催しが一年を通して行われました。紀元二千六百年奉祝美術展や文部省の指導下に行われた献納展には、横山大観をはじめとする多くの巨匠たちが富士山の絵を献じています。美術作品に限らず、子供の雑誌付録など日用品や広告の中にも富士山が繰り返し表されました。こうした資料は、当時の人々が富士山を目にしていたい何を連想したのか、潜在的に共有して

いた思想の一端を私たちに物語ってくれます。一方、若い画家たちの中には、戦争への複雑な胸中を富士山に描き込むことで表現する者がいました。時代に翻弄はたらくされる画家たちの心境が、富士山という一つのモチーフを通じて浮き彫りにされます。

そして展覧会を締めくくる第三章は、戦後の美術です。敗戦によって「国体の象徴」の役割から解放されても、富士山は日本一の山として、日頃、目にする紙幣や切手、コマシヤルなど、私たちの生活に生きています。テーマを「伝統への回答」として、「日本一を描く」ことを信条に富士山を描き続けた画家たち、そして「アイコンとしての現代富士」という観点から現代美術の世界で活躍する画家たちの作品を紹介しました。大戦後、芸術家たちは作品をより自由な表現世界へ飛躍させますが、富士山の美術も例外ではありませんでした。それは、千変万化するありのままの姿であり、自身に内在する姿でした。しかし、そうした富士山像は、戦後に芽生えたものではなく、北斎の活躍した江戸時代はもろろんのこと、古くから誕生しています。彼らとの違いは、数々の名作を残した偉大なる古人たちに対



展覧会会場風景

し、さらには既成概念からの脱却を常に求められる画家自らに対して挑戦し続けなければならぬところにあつたのです。

強いて富士山の画家といえは、日本画は横山操、小松均、片岡球子ら、洋画では梅原龍三郎らを挙げる事ができるでしょう。それぞれが独自の画風を確立して、また名声を獲得するに及び想像を絶する重圧と苦難に直面し、その末にたどり着いた救世主であり、最大の宿敵が富士山だったのです。信仰や奇観の対象、また日本のイメージを海外へ発信する媒体、さらには国威発揚の切り替え装置ではなく、平和の象徴であり、



丸山清人《銭湯絵》2008年6月7日制作

日本人の心のよりどころであり、また未来を映し出す鏡としての富士山がありました。一方、画家たちによって新たな解釈が試みられ、単なる日本人の心の拠として位置づけることのできない、複雑な文脈で読み取られるようになりました。伝統的な画題である富士山を自らの美意識によって描き

出そうとした画家たちがいる一方で、戦後の若い画家たちの中には、「伝統」へのアンチテーゼとしてそれを利用し、表現する者が登場しました。彼らは、それまでの神々しいイメージを逆手にとつて、ある時は戦後体制への風刺として、ある時はパロディー風に、ある時は過激に、作品の中に描き込みます。さまざまな問題をはらむその混沌とした内実を一言でくくることは困難ですが、最も日本らしく、そして多くの先人たちが挑んだ富士山という存在は、美術家たちにとつて目をそらすことのできない重要なテーマとなりました。富士山の「形」を表すことで、そこに何らかの「日本的なもの」を示唆することができるのも事実です。

伝統的な日本美術はもろろのこと、風刺的なものから、思想のメタファーとして、あるいはポップなデザインとして、富士山の魅力は尽きることがありません。世界が拡大し、表現手段が多様化してもなお、アーティストたちを引きつけ、日本人の精神の大きな礎いしづえとなつていくことが改めて実感されました。明治、大正、昭和、そして平成の世においてもなお、描かれ続ける富士山。それは、伝統的な価値観や役割から

解放された、新しい日本の象徴アイコンとも言えるのではないのでしょうか。

最後に、現在でも生活に密着した富士山といえ、銭湯の富士山が挙げられます。展覧会の初日にはオープニングイベントとして、銭湯の背景画家・丸山清人氏による公開制作を行いました。「富士山といえは銭湯、銭湯といえは富士山」のイメージの通り、雪を頂き雄大にそびえる青い山容は、私たちが無意識に連想するある種のプロトタイプともなっています。イベントでは、西伊豆から望む雄姿をモデルに、当館オリジナルの富士山を描いていただきました。見事な手さばきにご会場の見学者からも感嘆の声が上がりました。縦二メートル、横五メートルという大きな画面でありながら、わずか三時間という早業で美しい富士山が完成しました。末広がり縁起物というめでたいイメージは、現代においてもなお、私たちが共有する富士山像の筆頭に挙げられるのではないでしょうか。

それぞれの時代を通してさまざまに姿を変えてきた富士山は「日本の象徴(シンボル)」であり、これからもそうあり続けることでしょう。

(ひらばやしあきら／わださちこ)

# 「観光立県しずおか」の空の玄関口「富士山静岡空港」の開港 ——静岡県の「観光新時代」に向けて

静岡県産業部観光局 局長

出野 勉

## 静岡県観光の現状

静岡県は、世界に誇る秀麗・富士山、恵み豊かな海、東西を結ぶ回廊として培われた文化、さらには温泉、花、食など長い歴史や暮らしの営みの中で育まれた数多くの魅力を持つ観光立県といわれてきた。

しかし、近年の観光地間競争の激化により、観光交流客数（観光レクリエーション客数＋宿泊客数）をはじめとする各種指数がピーク時を下回る状況が続いている（図）。

本県独自の調査であるが、平成十九年度の観光交流客数は一億三千六百七十一人で回復傾向にはあるものの、ピーク時の昭和六十三年度の一億四千四百八十八万人の九七％にとどまっている。また、宿泊客数に至ってはピーク時の平成三年度の二千七百六十五万人に対し、平成十九年度

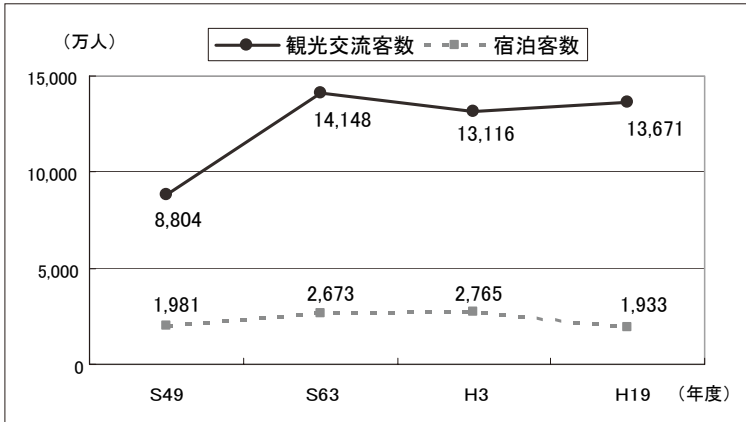


図 観光交流客数および宿泊客数の推移

は千九百三十三万人と七〇％に満たない状況である。

原因としては、本県の観光が従来型の囲い込み型の誘客方式を主流として事業推進を図ってきた結果、近年の女性客や団塊の世代を中心とした個人型観光客の増加に対応し切れていないことや、観光交流客の約八〇％が県内や首都圏が中心（表1）であり、北海道や九州といった遠隔地のお客様に対する情報発信がおろそかになり、自ら積極的に観光客誘致を図ってこなかった結果と考えられる。「黙っていても客は来る。」という静岡県観光の良き時代は終焉したのである。

## 「観光しずおか躍進計画」

### ——後期行動計画——

このような現状を打破するため、平成

十一年に策定した「観光しずおか躍進計画」を全面的に見直し、NPM手法(注)を活用した近年の観光の潮流に的確に対応できる「後期行動計画(平成二十二年度目標)」を平成十八年二月に策定し、全県に示したのである。

(単位：%)				
居住地	平成7年度	平成11年度	平成15年度	平成18年度
静岡県	30.4	31.6	32.1	39.6
北海道	0.8	1.2	0.3	0.2
東北			0.7	0.4
関東	49.0	46.7	45.6	40.3
中部	15.5	15.9	17.0	15.7
近畿	3.2	3.4	3.5	3.2
中国・四国	1.0	1.2	0.6	0.5
九州・沖縄			0.2	0.2

表1 旅行者の居住地

## 1. 時代認識

この計画での時代認識は、  
 ・アジアを中心として海外からの入国規制の緩和など外国人観光客誘致の環境の大きな変化  
 ・富士山静岡空港の平成二十一年の開港  
 ・NPOやFC団体等の活動が活発化し、観光振興における民間団体の役割の増加  
 ・市町村合併の進捗による行政や観光団体の組織の枠組みの大きな変化  
 ・静岡県が行ったNPM手法導入による企業経営的発想による行政活動  
 ・国におけるビジット・ジャパン・キャンペーン(VJC)の展開など政府自らの積極的観光客誘致や地域間競争の激化  
 ・団塊世代の大量退職による新たな旅行需要の創出

## 2. 戦略展開

上記のような時代認識の下、観光振興にかかわる各主体ごとにその役割分担を明確化しテーマの重点化と事業ターゲットの絞り込みを行うことにより、計画の最終年度

指標名	現状	平成22年度
再び訪れたいと強く感じる旅行者の割合	38%	50%
県内での旅行消費による経済波及効果	9,673億円	1兆128億円
平均宿泊日数	1.31	1.36
観光交流客数	1億3,528万人	1億4,000万人

表2 全体数値目標(観光しずおか躍進計画後期行動計画)

である平成二十二年度の全体数値目標を表2のようにした。

また、この計画を推進するため、「戦略展開の基本方向」「数値目標」「各主体の方向性」を明示した「観光魅力の向上戦略」「誘客促進の仕掛けづくり戦略」「観光交流を支える社会基盤づくり戦略」「人間力の向上戦略」「経営力の向上戦略」という五つの戦略とこの戦略に基づく十二の戦略

プログラムを設定し、各実施主体それぞれが主体的に活動する中で、各プログラムを有機的に結合させながら総合的に推進することとし、このプログラムを各実施主体が誠実に実践することにより、静岡県「観光新時代」に対応していくこととしたのである。

## 「富士山静岡空港」

### 開港に向けての取り組み

国においては、平成十八年十二月「観光立国推進基本法」が成立し、平成十九年二月には「観光立国推進基本計画」が閣議決定され、いよいよ本年十月一日には観光立国を総合的かつ計画的に推進するため「観光庁」が発足したところである。

静岡県においても平成二十一年の「富士山静岡空港」の開港を控え、前述の「後期行動計画」の推進と静岡県の「観光新時代」に的確かつ機動的に対応するため、本年四月に「観光局」を設置し、観光振興施策を積極的に推進することとした。

## 1. 富士山静岡空港の概要

定期便就航決定路線

札幌線

一日二往復（日本航空、全日空）

福岡線

一日三往復（日本航空）

沖縄線

一日二往復（全日空）

ソウル線

一日二往復（アジアナ航空）

（平成二十一年夏就航予定）

小松線

一日二往復（フジドリームエアラインズ）

熊本線

一日一往復（フジドリームエアラインズ）

鹿児島線

一日一往復（フジドリームエアラインズ）

- ・フジドリームエアラインズとは、平成二十年六月に静岡県の地元企業が設立した新航空会社。
- ・現在就航要請中は中国、台湾、香港、タイ等東アジア各国。

## 2. 富士山静岡空港開港を契機とした観光振興

### 表1の通り、本県の観光交流客は県内や

首都圏中心であり、就航先である北海道、九州・沖縄はそれぞれ〇・二%を占めるに過ぎない。つまり、静岡県観光の市場として

はほとんど未開拓の状況であった。しかしながら、北海道は約五百六十万人、九州全体（沖縄を含む）では約千四百七十万人の人口があり、今後、富士山静岡空港の開港により、新たな市場として大いに期待できるのである。

また、外国人宿泊客数も国土交通省が実施した「宿泊旅行統計調査」によると本県の占める割合は全国の二%弱に過ぎない状況になっている。

国内はもとより東アジアを中心として圧倒的人気のある「富士山」「温泉」「ゴルフ」などの多様な観光魅力を持つ本県としては、富士山静岡空港の開港を契機として今あるパイの奪い合いではなく新たな観光需要を創出することにより、このような現状を打破し、静岡県の「観光新時代」を迎えるための観光振興を図ることとした。

## 3. 平成二十年度の主な取り組み

前述の通り五つの戦略十二のプログラムにより、平成二十年度も事業推進を図っているが、これを重点施策別に分類したものが表3である。

## 今後の方向性

富士山静岡空港の開港は、本県の観光

関係者にとって従来の「待

ちの観光」から積極的に

「攻めの観光」へ踏み出す

大きな転機となり得る。

地域の創意工夫を生かし

主体的な取り組みを国・

県が積極的に支援し、自ら

住む地域を自らの努力で

「住む人も訪れる人も快適

と感ずる地域」に変えて

いくことが重要である。

観光は第一次産業から

第三次産業までの非常に

裾野の広い産業である。

旅館・ホテル経営者や観

光施設関係者にとどまら

ず、地域に住む人々が皆

共通の目的を持って来訪

客をお迎えすることがで

きるようになったときに、

静岡県の「観光新時代」

が始まるのである。

(注) NPM(ニュー・パブリック・マネジ  
メント)とは、公共部門においても企  
業経営的な手法を導入し、より効率的

で質の高い行政サービスの提供を目指  
す新しい行政経営の考え方。

(いづれの ことか)

① 県内全域の観光振興	県内・首都圏・中京圏・関西圏	地域の観光支援	○観光情報の発信	・観光案内所の運営(静岡・東京・大阪・名古屋)ほか
			○大型観光キャンペーンの実施	・「富士山」と「花」をテーマとした誘客宣伝による県内周遊の促進 H. 20. 4. 1 ~ H. 21. 1. 31
			○広域連携による観光客誘致(東海・富士箱根伊豆・中部・関東)	・周遊観光ルートの開発 ・ホームページによる情報発信
			○宿泊産業の振興	・観光客の受入に関する経営者、従業員への研修と意識啓発
			○観光関係団体との連携	・フィルムコミッションの推進 ・モデル地区の指定による「おもてなし」運動の全県普及
			○旅行商品開発	・「ふじのくに観光振興アドバイザー」の派遣による助言、指導 ・地域の魅力ある観光地づくりへの助成 ・地域が企画する旅行商品の開発と首都圏等への販売 (県観光協会に旅行業務の経験のある「しずおかツーリズムコーディネーター」3名を配置(5月))
○観光人材育成	・地域の観光リーダーの養成研修、観光商品の企画・広報の研修			
○地域で造成した旅行商品の広報	・メディアを活用したPR、メールマガジン配信			
② 空港開港に合わせた誘客促進	国内遠隔地 ・札幌 ・福岡 ・鹿児島 ・沖縄	新規マーケットの開拓	○誘客活動(国内)	・観光キャンペーンの実施(札幌、福岡、鹿児島、沖縄) ・「ふじのくにしずおかフェア」による本県物産PR(札幌、福岡)ほか
			○旅行商品の販売促進	・「しずおかツーリズムコーディネーター」による国内遠隔地への営業促進
			○情報発信	・空港発着の観光交通アクセスのホームページの整備 ・観光ホームページ「ハローナビ」の完全リニューアル(9月末。英語、韓国語、中国語(繁体字、简体字)) ・海外観光展への出展(中国、韓国、台湾等)ほか
			○誘客活動(海外)	・三県(静岡・山梨・神奈川)知事によるトップセールス(4月24日、上海) ・ソウル事務所に観光専任職員(5月)、台湾に現地観光連絡員を配置(9月)ほか
			○訪日教育旅行の推進	・中国、台湾等からの教育旅行の誘致・受入の促進
			○外国人観光客の受入態勢の整備	・「静岡おもてなしツール」の作成(対応事例、素材集、指さし会話集) (韓国語、中国語(简体字、繁体字)、英語)ほか
③ コンベンションの誘致促進	海外(東アジア) ・韓国 ・中国 ・香港 ・台湾	コンベンションの誘致促進	○コンベンションビューローとの連携強化	・「静岡県コンベンション推進協議会」による情報の共有化、政策課題研究の推進 ＜構成＞ 県、静岡市、浜松市、沼津市、富士市、県内5つのコンベンションビューロー(静岡・浜松・熱海・東部・富士山)、県観光協会等
			○国際イベントの誘致	・第4回日中韓観光担当大臣会合(平成21年)の中部圏での開催決定 ・「2009日台観光サミット」の(平成21年3月)の本県での開催決定

表3 本年の重点施策

# 広域連携による国際観光振興

## ——富士箱根伊豆国際観光テーマ地区の場合

山梨県観光部国際交流課 課長補佐

古谷 健一郎

### 驚きの広域観光と

#### 様変わりした富士山五合目

五年ほど前、韓国の友人が来日した時の話である。彼が山梨に来るまでのルートを聞いて驚いた。釜山からフェリーで下関へ渡り、下関からはレンタカーで北海道を目指したが、途中、福島辺りで季節外れの大雪に阻まれ、日光で観光をしてから山梨まで南下してきたという。そして、山梨の後は名古屋と大阪に立ち寄り、九州方面に向かつて行った。

また、翌年彼が職場の同僚達と富士登山に来た時のこと。夜の九時くらいに五合目まで送って行った際、ふと気づいたのは、土産店の外に設置されたスピーカーから流れってくるアナウンスのほとんどが日本語ではなく、韓国語や中国語であったことだが、

もっと驚いたのは、富士山に登っていく団体に、韓国や台湾のツアーが少なからず含まれていたことであった。

現在、韓国からの富士登山ツアーは定着しており、本県の富士山登山証明書の発行件数だけでも一シーズンで四百件近くとなっている。また、東京・大阪間のツアーで富士山周辺に立ち寄る中国人団体が急増しており、最近では、タイやシンガポールなど東南アジアからのツアーも増えてきている。

富士山周辺に限らず、外国からの観光旅行の多くは、少なからず広域に動くことが多い。また、数年前までは外国人などあまり見かけなかった観光スポットに、今や日本人より多く来ているという事例も増えている。スバルラインの起点にある山梨県立富士ビジターセンターを訪れる外国人観光

客は、二〇〇六年から日本人観光客を凌駕し、年間十万人以上が立ち寄るといった、夏の二カ月間で富士登山をする外国人は五千人とも言われている。

### 富士箱根伊豆国際観光テーマ地区の概要

一九九八年四月、山梨・静岡・神奈川の三県は、富士箱根伊豆を中心とした地域における国際観光の振興に向け、全国に先駆けて『富士箱根伊豆国際観光テーマ地区外客来訪促進計画』を策定し、「自然のワンダーランド・富士―自然と都市、歴史と文化がもてなす日本の旅―」をテーマに、外国人観光客の誘致と受け入れ体制の整備を広域的に進める基礎を築いた。

富士箱根伊豆地区の特徴は、日本の象徴とも言える富士山をはじめとした多様で美しい自然景観、古都・鎌倉に代表される歴



史的遺産、箱根や伊豆など伝統ある温泉地、国際都市・横浜など、バラエティーあふれる観光資源に恵まれていることである。

また、立地条件から見ても、成田空港や羽田空港、中部国際空港に加え、二〇〇九年に開港予定の富士山静岡空港などの空からの玄関口や横浜港など国際港が地域内および隣接して存在しており、ゴールデンルートと呼ばれる東京方面から中京・関西方面に抜ける途上にあること、東京に近いことから訪日外国人を多く取り込むチャンスを持っている。

テーマ地区の区域は、図1に示したように、二十市・九町・三村の計三十三市町村で構成されており、うち二十市町村が宿泊拠点地区となっている。この三県、市町村、事業者により推進協議会を構成するとともに、各県レベルでも協議会を設け、インバウンドの振興に取り組んでいる。

当テーマ地区の外国人旅行者の誘致目標は、二〇一〇年までに百四十万人、計画最終年に当たる二〇二五年の目標を百五十五万人としており、二〇〇六年には百三十八万人と今のところ順調に推移してきている(図2)。

テーマ地区では、観光展への出展、広報

宣伝活動、ホームページの運営、パンフレット作成などの事業を実施している。

平成二十年度は、F1を契機としたテーマ地区の魅力の発信としてシンガポールの旅行会社やメディアの招聘、「日韓交流おまつり2008 in Seoul」への出展、台湾からの教育旅行関係者の招聘など、国のビジット・ジャパン・キャンペーン(VJC)と連携した事業展開を図るとともに、ウエルクラムカードのサイト運営による情報発信、観光マップの作成、招聘事業後のツアー造成フォローアップなど、アジア市場を中心にさまざまな誘客宣伝活動を行っている。



図1 富士箱根伊豆国際観光テーマ地区：  
外客来訪促進地域および宿泊拠点地区の区域

### 三県連携の新たな展開

昨年十月、静岡県で開催された三県知事サミットの中で、二〇〇九年の羽田空港の再拡張・国際化などの好機を控え、増大が見込まれる東アジアからの旅行者の取り込みを図るため、上海市において三県合同の観光トップセールスを行うこととなった。これにより、四月二十六日に三県の知事が上海市を訪問するとともに、上海市との間で『相互交流並びに協力促進に関する覚書』を締結し、「観光をはじめとした幅広い分野での

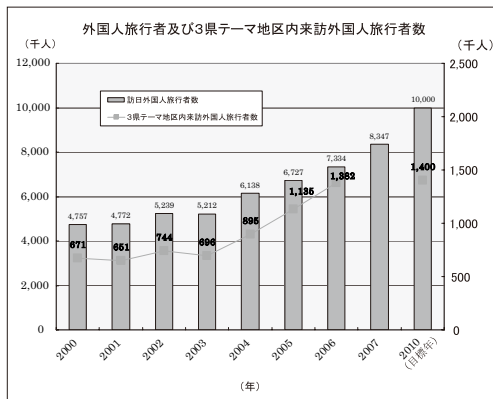


図2 外国人旅行者および3県テーマ地区内来訪外国人旅行者数

相互交流の推進」、「上海万博への賛同・応援」などについて合意したところである。

また、本年十月に神奈川県で開催されたサミットの席で、来年度は、横浜開港百五十周年でもあり、上海市から青少年の交流を受け入れ、三県の観光スポットを周遊してもらうなど、具体的な誘客に向けて共同で事業を実施するとともに、二〇一〇年の上海万博を見据えて、三県で交流プロジェクトを合同で進めていくことについての合意がなされた。

加えて、富士山静岡空港と羽田空港を結ぶ富士箱根伊豆地域の観光周遊モデルコースの開発や旅行者への商品化に向けた提案等についても連携して実施していくこととされており、今後とも三県の広域連携による国際観光振興のための取り組みは、ますます充実していく方向で進んでいくと思われる。

## 広域観光の今後の展望と課題

VJICが浸透する中で、東京や大阪・京都など大都市ばかりでなく、北海道や九州など、特色ある地方へのインバウンド観光客の増加が最近の動向として挙げられる。

例えば、韓国や台湾からは富士山空港から入る立山黒部アルペンルートコースの人氣が定着しており、毎年、数千人規模のツアー客が訪れている。その一部で、長野から山梨県の八ヶ岳南麓を経由して東京方面へ抜けていくツアーも出てきており、今後は、富士山空港と富士山静岡空港を結ぶツアーコースの造成など、より広域に展開していくようなアプローチが想定される。

また、シンガポールでは、航空機とレンタカーを活用した「フライ&ドライブ」という新たな旅行形態の北海道ツアーに人氣があり、昨年、富士箱根伊豆地域においても、試験的にシンガポール航空のエアバス380就航に合わせた旅行商品の投入が行われ、北海道以外の地域においても、この形態のツアーが可能であることを実証した。

今後の課題は山積しているが、その主要なものとして、富士山や箱根、横浜など海外でもネームバリューのある地域以外への誘客が掲げられる。本テーマ地区においては、それを解決する一つの手法として、台湾などからの訪日教育旅行の誘致に積極的に取り組んでいる。教育旅行の受け入れ自体は、学校交流やホームステイ、教育旅行

のためのプログラム開発など、非常に手間ひまのかかるものであるが、教育目的で来ていることと、比較的長期の周遊型旅行であるため、富士山以外の地域にも訪れてもらえるメリットがある。また、将来的なりピーターとしても期待されると同時に、旅行会社に対するアピールという点でも有効であると考えている。

さらに、個人旅行の受け入れ体制についても充実していくことが求められており、外国語対応可能な案内所の拡大、宿泊施設や観光施設など加盟施設の割引特典が受けられるウエルカムカードの有効活用、共通乗車船券などのパスの充実が課題となっている。

## 結びに代えて

広域観光の仕事は、普通のブロック会議などとは違い、濃密かつハードである。一千万円規模の事業予算を持ち、各県が担当業務を割り振り、調整をしながら事業を進めていくため、局面によっては互いの利害が対立し、困難な状況に直面することもあるが、各県の持ち味を生かした共同作業の結果が着実に相乗効果を生み出してきている。（ふるや けんいちろう）

# 富士山の自然の魅力と価値を語り伝える

NPO法人富士山自然学校 理事長

渡辺 長敬

はじめに

富士山は日本の象徴、世界の富士山などといわれ日本人の誰もがあこがれている存在。近年ではその富士山の世界文化遺産登録を目指す動きがあり、富士山も以前よりも見直されつつある。しかし、さまざまな問題を抱えている富士山でもある。ここでは私の携わった富士に対する思いと取り組み等の変遷を紹介してみる。

## 新田次郎の富士への思い

一九七五年、地元の新聞社の依頼で作家・新田次郎が書いた一文は幻の原稿となった。「富士を守れ」は、あまりの激しさに新聞社では書き直しを頼んだ。原題は「自然保護運動」となっている。

新田次郎は激しい口調で述べている。自

然の中から植物や岩石を持ち出すのも「犯罪」だ。けれども、それが問題にならぬよう「合法的自然破壊」が行われている。

私は三合目から五合目にかけてのあの荒廃ぶりをみて涙が出てしようがなかった。自動車道路の犠牲となって滅び行かねばならない富士山の自然が可哀そうではなかった。自然を破壊しその屍の上<sup>しかばね</sup>に立つて景色を眺めていい気になってい

る観光客もさることながら、人間そのものの証として神より与えられた、日本の自然を自らの手で破壊して日銭を稼ぐ乞食観光を行って恬然<sup>てんぜん</sup>として恥じない山梨県に対して怒りを感じずにはいられなかった。

雪の富士 守る精神<sup>こころ</sup> 鉄の盾

字は乱れて、誤字などに構っていられない様子が伝わってくる一文である。

そして原稿の末尾に「この原稿は著者返却の必要はありません。内藤成雄先生に進呈してください。新田次郎」と記されていて、故内藤成雄先生(作家・新田次郎の研究者、元学術文化自然保護団体「富士こぶしの会」の会長)のもとで保存され、後に山梨県立文学館の企画展「旅の文学」に公開されている。私もこの一文にたいへん感銘し富士に対する思いを新たにしたい一人である。

## 富士山の自然保護活動の始まり

富士山の自然保護活動がにわかにはまったのは一九九二年五月。山梨県は富士山五合目に三層四階建ての駐車場を建設する計画で、県議会ではすでに予算化され工場発注を完了し着工寸前であったが、五合目駐車場周辺にスバルライン開設以来堆積した大規模なごみが原生林内に流れ込んだ惨状

や、雨水で浸食され数百本に上るカラマツ、コメツガなどの原生林の樹木が倒壊した惨状を取り上げ、立体駐車場建設反対運動が始まった。

この反対運動は緊急に、地域の有志で構成された自然保護グループ「富士山の自然を愛する者の集い（代表・筆者）」によって問題提起され、やがて全国規模の運動へと発展、『「ニューヨーク・タイムズ」でも報道された。

着工は延期され計画の見直しが進む中で富士山自体が結論を出した形で計画が中止された。同年十二月八日に大規模な土石流（雪代）が発生しスバルラインを直撃した。土石流は富士山の六カ所で同時発生し、山岳道路の危険性を露呈することとなった。

山梨県はスバルラインの危険個所の対策を強化することとし立体駐車場建設を断念することとなる。同時にスバルライン沿線の破壊された原生林の修復と緑化への取り組みを本格的に開始した。

富士山における自然保護活動は、五合目立体駐車場建設反対運動を契機に急速に関心が高まることとなる。

## 「富士山」知れば知るほど深い山

### ●富士山は自然の芸術家

富士山は成層火山で、小御岳火山と愛鷹山の基盤上に古富士火山、新富士火山が重なった四層構造とされていたが、小御岳火山の下に古小御岳火山が存在し五層構造であることが確認されている。

こんな富士山の成層構造を見ることのできる地形が富士山の随所に存在する。

富士の山腹には、度重なる噴火で堆積した火山灰層を雨水によって百メートルもの深さに浸食した富士山のグラウンドキャニオンと呼ばれる地層の断面が一キロメートル以上も続いている。大沢崩れの源頭部では富士の山頂まで山体を割りながら上昇したマグマの痕跡と、山頂から流出した成層火山の構造を示す火山断面がはつきりと見られる。これらは富士山ならではの、まさに世界遺産級の地形だ。

一九九〇年五月中旬の早朝、富士山七合目付近の植生調査の際の出来事である。一九八九年夏に発見したバラ科の高山植物「タテヤマキンバイ」（氷河期からの依存植物といわれる）の調査中、突然上流から雪



図1 富士山のグラウンドキャニオン

解け水が沢沿いに流れ出した。瞬く間に川が出現、上流を見ると五段もの滝が現れた。さらに、下流にも枯れていたはずの断崖に五十メートルもの落差で二段の滝が現れた。雪解けの水を集めた、季節限定、時間限定のまさに幻の滝である。

富士山にはお花畑は存在しないといわれている。富士山は火山灰の堆積した地域が多く、絶えず強風や雨水による土壌移動のた



富士山に現れる季節限定、時間限定の、幻の滝

め、植物の定着しにくい過酷な環境であるためだ。しかし、溶岩流に覆われた大地では土壌の移動も少なく安定しているため、植物群落の発達した素晴らしいお花畑が見られる。このような環境では、遷移過程にある富士山の生物多様性を知ることができる。

### ●富士山は自然環境の創作家

富士山は日本の最高峰であり、周囲に連なる山体を持たない単独峰である。このことが富士山とその周辺の生態系に重要な環境的要素を創り出している。

富士山には太平洋側から常に温暖な暖気流が流れ込み、富士山が気流を遮ることで気流は富士山の東西を迂回する。富士山北面の海拔千メートル付近の天子山地、御坂山塊、丹沢山地等によって遮られるため富士山麓の東西の位置で気流は滞留することとなり、東の山中湖周辺と西の本栖湖周辺に霧の発生しやすい場所ができる。

西側は朝霧高原と呼ばれ、この霧の発生しやすい場所に偶然噴火によってできた青木ケ原樹海が位置している。溶岩流の大地は森の発達しにくい場所だが、このような霧の発生しやすい場所であったために、わずかに千百年の間に青木ケ原樹海を創り出したのだ。

東側では「御殿場降る降る吉田照る、愛の籠坂霧で待つ」と歌われ、「霧の籠坂」とも呼ばれている。北面に当たる地域には青木ケ原溶岩流とはほぼ同時に噴火した剣丸尾溶岩流（富士スバルライン周辺）がある。

ここでは青木ケ原樹海と異なるアカマツの森が作られていて、陽樹林と呼ばれる初期林だ。同年代の噴火でありながら、青木ケ原樹海は遷移の進んだヒノキやミズナラ、カエデ類を交えた原生林となっている。違いの理由は霧の発生しやすい青木ケ原樹海

の環境と、迂回する暖気流の届かない北側に位置する剣丸尾の環境の違いで、長い間の歳月を経て、富士山自身が創り出した周囲の環境は素晴らしい生態系を育んでいる。

また、富士山では植物の分布は西高東低を示している。これは、富士山の噴火の歴史とも深く関係して、単独峰である富士山は季節風の影響を強く受け西側では山頂に向かって吹き上げる風となり、東側では吹き下ろすこととなる。風環境の影響を受けて植物の種子運搬も同様な仕組みとなっている。また、富士山の東側に多くの火山灰が堆積しているため、土壌の移動と関係して植物は繁殖しにくい環境となることから、単独峰の富士山では西高東低の植物分布が顕著に表れている。

### ●富士山は特殊植物の創作家

富士山は溶岩やスコレアの火山大地であるため、栄養や水分に乏しく、強い紫外線を受ける過酷な環境のもとで、植物たちはその環境に順応するため、長い間にその性質を変化させ、形態や生活系に分化を生じ、富士山地域に固有の種を生み出している。フジハタザオ、フジアザミ、フジザクラ、フジアカシヨウマ、フジオトギリ、フジチドリ、フジサ



青木ヶ原樹海等エコツアーガイドラインに沿ったエコツアーモデルコース洞窟観察

ンニシキウツギ、フジセンニンソウ、サンシヨウバラなどが富士の創り出した特殊な環境のもとで分化した代表的な植物である。

これらを含めフォッサマグナ地域で生育し分化した植物が「フォッサマグナ要素の植物」と呼ばれている。

富士山にはまだまだ知られていない素晴らしい多様性が秘められている。我々は富士の創り出した素晴らしい自然の芸術を多くの人に伝え、子供たちに伝承していくためにその役割を果たしていきたい。



ここで2月14日ダイヤモンド富士&アイスクャンドルフェスティバルが行われる

### 自ら守る姿勢を示すことの重要性

素晴らしい富士山の自然を残していくために富士山周辺の環境保護団体やエコツアーの実施団体が集まって富士山北麓環境ネットワーク(理事長・筆者を二〇〇三年一月に設立し、さまざまな活動を続けている。富士山のし尿やごみ問題に取り組むバイオトイレの試験的導入に取り組む団体、資源調

査やエコツアーの質の向上に取り組む団体、地域の自然回復に取り組む団体などがある。

近年富士山麓の原始的な自然の宝庫といわれる「青木ヶ原樹海」に異変が起こっていることに気づいたのが二〇〇三年だった。議論の末、シンポジウムを開き多くの人々に惨状を知っていただく機会を設けた。「富士山の環境シンポジウム」(青木ヶ原樹海の適正利用を考える)がテーマである。

青木ヶ原樹海の洞窟に通じるルートに、延々数キロにわたり、原生林の林床が冒険ツアーによる踏圧被害のために無惨にコケがはがされ、むき出しになった根が痛々しく露出した光景が続いていた。シンポジウムによって「青木ヶ原樹海の被害現地調査」を行うこととなり、現地の異状に気づいた山梨県観光部と関係する団体とで青木ヶ原樹海の適正利用とガイドラインの策定を議論する協議会が発足した。議論の末、二〇〇四年七月一日に「青木ヶ原樹海等エコツアーガイドライン」が施行され管理者である行政と各種団体との合意のもとに決定し運用されており、定期的な現地検証も行われている。地域の環境保護団体と行政とが連携して取り組んだ模範的事業と言える仕組み

が誕生した。現在では森の奥深く踏み込む人も見られず、遊歩道を歩いて楽しむエコツアーが定着して静かな青木ヶ原樹海に戻り始めている。一度破壊された樹海の生態系が元に戻るのはいつになるのか、延々と復元に向けた検証が続けられていく。

## オール富士山

### ネットワークの必要性

富士山北麓地域は、環境省からエコツーリズム推進モデル地域の指定を受けて事業に取り組んできた。しかし、富士山地域を構成する各自治体の間でも取り組みに温度差があり、事実、それぞれの地域の生活基盤や財政基盤も違う。リゾート地としての基盤を持つ地域、マストツーリズム的集客に向かった地域、農業基盤を維持してきた地域、過疎化の中でエコツアーを主体に再生に向かっている地域など多様である。それぞれの地域の持つ特性を生かしたエコツーリズムの構築に向かわねばならない。

富士山麓地域が同じ方向性でエコツーリズムの推進に取り組むには課題が多く、多くの団体や関係者のネットワークこそ、その難題解決の近道である。

## 人づくりの大切さ

各地で施設の建設等が行われているが、とかく、予算を投入して事業の遂行は難なく行われるが、施設の運営が思うに任せず倒産、閉鎖に追い込まれるケースや、やむなく指定管理者制の導入等の対応に移行するケースが多い。

山中湖村ではNPO法人富士山自然学校と連携して山中湖交流プラザ「さらら」建設計画と同時に施設の運営人材の教育に着手し、三年後の施設完成を目指して、官民一体となった取り組みが行われた。

ボランティアインストラクター養成講座に地元住民二十五人が応募し養成講座が進められ、建設される公園内の植栽計画、植栽樹種・草本の選定、供用後の学習フィールドの設定や学習プログラムの開発が進められ、住民の意思を反映したワークショップが確立された。供用後はスムーズに運用が開始され、十分な成果を挙げている。

エコツーリズムの推進に向けて住民、企業、各種団体やノウハウを持つNPO団体や行政が一体となった仕組みを構築する必要性があり、山中湖村では四つの地域（山

中地区、長池地区、平野地区、旭日丘地区）にそれぞれの地域の資源の活用や将来像を策定し運用する地域エコツーリズム推進協議会を設置した。中央の山中湖村エコツーリズム推進協議会では、これらの地域の懸案事項やエコツーリズムの推進に向けたプログラムの支援活動を中心とした組織の構築を進め、運用が始まっている。

全国的にも新しい仕組みと取り組みに期待したい。  
(わたなべ のぶよし)



山中湖の冬の風物詩「ダイヤモンド富士」十月二十日～二月二十三日まで四ヶ月間山中湖で見る事ができる。



連載 I  
あの町この町  
第 30 回

# 赤鬼の見張り — 長野県・大町市

ドイツ文学者・エッセイスト

池内 紀  
(イラスト＝著者)

J R 信濃大町駅から北西二キロばかりのところ、若一王子じやくいちおうじという神社がある。大通りに向かって大きな鳥居が見え、杉の古木が立ち並んでいる。参道が直角に折れるかたちで、赤い小鳥居をくぐると右手に三重塔、正面奥に拝殿と本殿。すつきりした気持ちのいい境内を、ていいていとびた杉林がつんでいる。

社伝によると垂仁天皇の世にさかのぼるらしいが、現在の名前になったのは室町末期のこと。当地の豪族仁科氏が熊野大社に詣で、その「若一王子」を勧請したので始まり。ながらく若一王子権現だったので明治の神仏分離の際に神社と改めた。春日造りの本殿は重要文化財（旧国宝）、三重塔や観音堂をそなえているのは神仏習合の名どころである。

本殿の軒に、ヘンなものを見つけた。大き

な耳をもった赤鬼で、額に角を生やし口の端から牙がニューと出ている。それが千木ちぎをいたたく小屋根の下からのぞいている。

拝殿裏手の柵ごしに見上げるしかないのだが、もし目の前にあるとしたら大人の背丈ほどに大きいのではあるまいか。太い眉が木の葉状に様式化され、黒い目玉と大きな三角鼻。角、耳、顔全体が朱色で、歯を剥き出して威嚇するようでもあれば、ニヤリと笑っているようでもある。

「拳鼻こぶしなを幾重にも付けていること、各種の組物の形が重厚であること等々、この社殿は比類希にして……」

社務所でもらった由緒書は、「莊嚴で複雑な架構法」のことは述べているが、軒の赤鬼には触れていない。さらに正面左右に黒ずんだ像があつて、異獣を刻んでいるようだが、まわりの手すり邪魔をして、しか

とはわからない。何やら黒いものが背を丸めてうずくまっている。

背後をひとまわりして逆の方角から見上げると、やはり赤い鬼面が鎮座している。視覚がいちど何かにとらわれると、あとはそれしか見えないもので、朱の一点が射るように目に入ってくる。

鬼瓦の始まりは、このような鬼だったのか。それとも宮大工が宮司とはかり、楽しい遊びをしたのだろうか。

赤ちゃんを抱いた若い夫婦と、双方の両親がお宮参りにやつてきて、拝殿前で記念写真をとっていた。その奥の上から赤つづらがみつめている。このたびはお神酒みみきのまわったおじいさんが、口を横にひんむいて赤ん坊をあやしているようでもある。

由緒書には上空からの写真がついていて、こんもりした社叢が島のようなかたまりを





若一王子神社の赤鬼

つくり、うしろに白雪をいたたく北アルプスがそそり立っている。

神社のあるのが俵町で、駅に向かって大通りをはさみ、西側は大黒町、九日町、上仲町、下仲町、仁科町。東側は相生町、白塩町、東町、下白塩町、日の出町、五日町。本通りは「塩の道」とよばれた千国街道で、信州と日本海を結んでいた。海港に陸上げされた塩や海産物が、牛や馬の背にのせられて松本から伊那へと運ばれていた。大町はその街道の重要な中継点であって、町名が旧市場町の名「ごり」とどめている。

「平成の大合併」で大町市に八坂村、美麻村が合わり、人口約三万二千。それにして

は商店街の大きいのに驚く。若一王子わきの大黒町に始まって、駅までの南北二キロを埋め、さらに、東西の辻ごとひろがっている。そんな町並みの規模からも、古くから北安曇野の中心町だったことが見てとれる。

若いころ山登りのたびにJR大糸線のお世話になった。烏帽子、三俣蓮華、槍ヶ岳、さらに北にのぼって、白馬、鹿島槍、針ノ木岳。こちらは縦走といった長丁場ではないので、リュックサックはふつうのタイプである。大荷物のパーツィ組のわきで、膝をかかえて小さくなっていた。

車窓の風景がこちよいい。巨大な山塊を背景にして水田やワサビ田がひろがっている。北アルプスをめざしたのは、たいていは夏のこと。陽ざしが濃い影を落としていた。同じく山好きの恋人と顔を見合わせながら揺られていたことなどがチャリと頭をかすめ、まるですべてが夢のような気がする。

そんな心もちと大糸線沿いの風景とがちようどよく合っている。安曇野は海神を祖神とする安曇族がひらいたとされている。穂高神社の祭りは御船祭といって、船型の山車が引き出され、船上を「女腹男腹」とよばれる人形が飾っている。古い歴史が夢

物語の様相をおびている。

穂高町の北が大町で、こちらは古族仁科氏の領分だった。とすると、その守護神の若一王子に赤鬼がいるのは不思議ではないのかもしれない。熊野権現のガードマンが海神族の侵犯を見張っている――。

勝手な想像をめぐらしながら本通りをぶらついた。チラホラとシャッターを下ろしたままの店がまじっているが、それでも長い商店筋に独特の雰囲気と商い気分といったものがある。造り酒屋の黒光りした玄関。元は画材店だったのか、二階にドーリア式の円柱をもち、軒に石こうのヴィーナスをのせた店。白壁に「龍」の一字をいただく豪壮な蔵。

「Custom Tailor」

急に横文字と出くわして面くらった。Tailorは仕立て屋、Customは何だったわけ？ たしか試験によく出る単語として習った。綴りでは「ク」のようだが音は「カ」であって、「カスタム」と発音する。顧客、お得意さまだが、これはイギリスの使い方、アメリカでは注文の品のこと。

「どうか、あつらえをいたしますだ」

大町の店先で、遠い昔の英語の試験と出くわすとは思わなかった。

ともあれ当節は洋服のあつらえをする人

も少なくなっただろう。「高級註文服」は古い看板で、新しいのはこんなぐあいだ。

「ジーン 作業ズボン 裾上げすぐやります」

「着づらい服 軽く着やすく直ります」

「至急やります 紳士ズボン裾上げ 婦人物ウエスト直し つづれ付き 手縫い」

入口に古風な絵タイルがはめこんであって、山高帽にフロックの紳士がステッキを持って立っている。

新旧の看板がくつきりと新旧の時代を告げていた。紳士ズボンに代わってジーン、あつらえに代わり裾上げやウエスト直し。それもすぐの仕上げを要求される。ガラスごしのぞくと、使い慣れた仕事台に新聞がひろげたままになっていた。

「エート、これは何だったか……」

しばらくショーウィンドウをながめていた。たしかに見覚えがある。親しい品物ではあるが、久しく目にしなかったこともたしかである。頭上の看板を見上げて思い出した。

「たばこ 喫煙具」

ライターである。「百円ライター」が出廻る前のガス注入式。ダンヒルといった高級品ではなく、ごく安手のものだが、容器にシヤレた飾りがほどこされ、カチリと押す

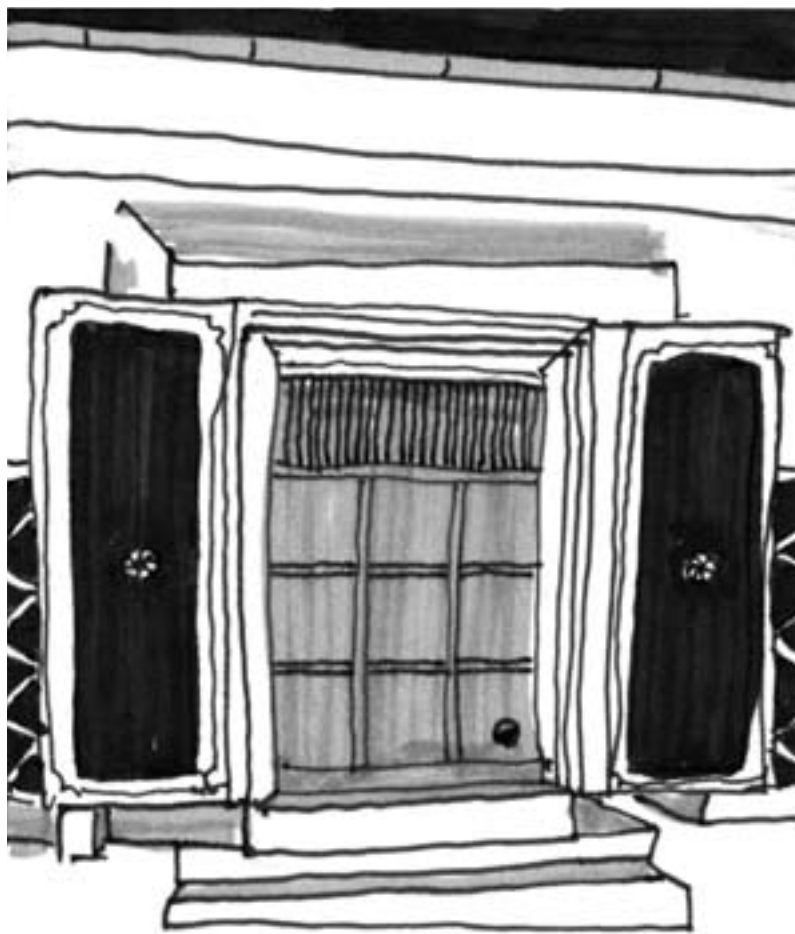
と小さな火がついた。デイトのときに何気ないふりで取り出してきて、恋人の前でカチリとやった。貧しい色男の精一杯の気どりの小道具だった。

奥のショーケースに懐かしいのが十数種も並んでいた。一つ三百円でゆずってもらえる。ちゃんとガスボンベもあって注入できるし、立派に使える。実用二途の百円物の登場とともに、みるまにが姿を消した美しいライターたちである。

「いま見てもよくできていますね」

店のおばさんと一つ一つ品定めをした。そのころ駆け出したデザイナーが腕を振ったのではあるまいか。流行のイメージやキャラクターをあしらったり、大胆な抽象のデザインでミニアチュア画のように仕立ててある。喫煙の害が言われたす前のことで、タバコは大人のたのしみ兼オシャレなアクセサリーだった。医学ではなく文化の分野の大切な担い手だった。大町の大通りで、プカプカふかしていたころの自分と出くわすとは、これまた夢にも思わなかった。

長い本通りの一角に商店街活性化センターがあつて、ポスターや案内が張りめぐらしてある。市中のあちこちに「ポケットパーク」を設けたのも活動の一つだろう。



市中・重厚な蔵

「街の中でホッとできる空間、小さな公園です」

塩の道博物館、山岳博物館、大町特産館、大町市観光協会、それぞれ工夫がこらされている。背後には温泉や雄大な山々が控えていて、ことのほか観光資源に恵まれている。

る。ただ何やら点がちらばっているだけで、線になっていない気がするのはどうしてだろうか？

駅からわりと離れたところに銀行や信金や造り酒屋がかたまっているのは、かつてはその辺りが町の中心だったからと思われる。

市役所は西かたのやや離れたところにあり、合同庁舎や保健センターは本通りをはさむ東に、市立図書館や遊園地は北のはずれ。そんな分散ぐあいのせいか、せつかくの駅前市場も閑散としていて、賑わいの核とはならないようだ。

医院の看板に「この奥」と赤い矢印が指していた。細い小路を入っていくと、小川をはさんで二つの蔵の前に出た。土と漆喰づくりの扉の厚さに目を丸くした。格子を組み合わせた引き戸と鍵穴が、みごとに造形美を見せている。おもわずホレボレと見れていた。何代にもわたる「町のお医者さん」ではなからうか。細い小路は近所の人の日常の通り道らしく、自転車の人がすり抜けていく。

本通りから枝分かれしたようにアーケードつきの「名店街」がのびている。新建材スタイルの悲しさ、こちらはできたときが絶頂で、年ごとにみすぼらしくなっていく。いっぽう本通りと裏手には、いかにも手のかかった旧の財産が眠っている。

新旧が折り合い悪く居並んでおり、「ボケットパーク」式の点の対策ではなかなか打開できないのではあるまいか。エリアごとに性格をはっきりさせて、その上で線から面にひろがるような求心的なつながりを

生み出していく。まず町内ごとに知恵をしぼって案を出し、それを行政があと押しをするのはどうだろう。雄大な北アルプスの麓にあって、大町温泉郷や青木湖、木崎湖を控えている。その玄関口を、ものさびしい町にはならないだろう。

若一王子神社とは対角をえがく山麓に仁科神明宮が祀られている。かつて当地は伊勢神宮の御領として御厨みくりやがあつて、その鎮護のためにつくられた。建久三年（一一九二）の古文書にすでにしるされているそうだから、平安時代の中ごろに始まるわけだ。

伊勢神宮は「式年遷宮」で知られている。二十年に一度社殿を造営して、神サマがお祈りをする。豪族仁科氏はさぞかしリチギな一族だったのだろう。永和二年（一二七六）に始まって、きちんと二十年ごとに式年造営をおこない、そのたび棟札をのこしてきた。

天正十年（一五八二）に仁科氏が滅んで松本藩主が受け継いだ。幕藩体制の官僚はハコモノを二十年ごとに取り換えるのを決つたらしい。寛永十三年（一六三六）以降は遷宮は省いて部分修理で代えることにした。ただし、棟札はかわらずつくっていく。おかげで六百年にわたる記録がのこされた。川沿いを立派な道路が長野自動車道へのびている。あまり立派すぎる気がしたの



仁科神明宮の大杉

でタクシーの運転手にたずねると、オリンピック道路とのこと。平成の官僚は大イベントにかこつけ、むやみやたらにハコモノを造つたようだ。

川を渡り県道に入ると、うっそうと繁り合つた小山が近づいてきた。神明宮の宮山であつて、名うての巨木が自生している。まるでオリンピックの現代から一挙に古代に入っていく感じ。

参道の左手に杉の大木が二本、くつつき合つてそびえている。近年まではもう一本がまん中にあつて「三本杉」とよばれていたそうだ。いずれも樹齢千年ぐらいつか。いかなるワケがあつて三本がひしめき合つたのか知らないが、二本ですら、みるからに息苦しげであつて、三本時代はさぞかし窮屈だったことだろう。

参道が九十度折れて石段と石畳につづい



北アルプス遠望

ていく。国宝の社殿は中門や釣屋とともに、わが国最古の神明造り。全体がスッキリと簡明な直線で出来ており、それだけにのつた千木の丸みが絶妙である。

拜殿右わきに巨大な切株があった。昭和五十五年（一九八〇）に枯死するまで「仁科さまの御神木」として親しまれていた大杉で、根廻り十五メートル、目通り九メートル。二代目に選定された御神木が本殿横手にあって、こちらは根廻り七メートル、目通り六メートル、推定樹齢八〇〇年。大木がことなげにのびているのは、宮山として古代からの自然環境をよくのこしているせいではあるまいか。

みるみる夕もやが立ちこめてきた。境内に明かりがともり、だいたい色の光が参道にさし落ちていく。

社務所の世話役の話によると、杉も古木ともなると「ハラをやられる」そうだ。中が空洞になって、突風を受けると、あつけなく折れる。巨木といえども見かけだおしが多い。

「人間とおんなしだわサ」

このつぎの式年遷宮は平成三十一年（二〇一九）、ぜひお参りをといわれたが、果たしてこの身が無事、地上に立っているのかどうか。

タクシーに向かっていたら、ふと赤鬼の由来がひらめいた。伊勢神宮には裏手にあたる場所に熊野権現が控えている。古人はしばしば見立ての方法で神を招いた。安曇野の宮山に伊勢の御厨があるからには、こちらにも熊野の権現さまにお移りを願わねばならない――。

仁科氏はそのように考えて、はるばると熊野へ出かけて若一王子を勧請したのではなからうか。とすると赤鬼の見張りはお隣り穂高の海神族ではなからう。安曇野のお伊勢さん、仁科神明宮である。目を剥き、牙を剥いて、南の方を見守っている。

（いけうち おさむ）



連載Ⅱ  
風土燦々③

孤島の相撲大会 (後編)

島根県隠岐の島町

ルポライター

飯田 辰彦

九月の古典相撲を打ち上げても、旧五箇村の住民は息つく暇もない。ふた月もたたないうちに、十一月三日には恒例の五箇地区相撲大会を迎えるからだ。相撲の盛んな隠岐では、不定期の古典相撲を筆頭に、各地域ごとの村相撲が定期的に開かれている。さらに、全島規模の重要な大会として、体育協会主催の全隠岐相撲選手権大会が毎年六月の第四日曜日に設定されてもいる。村相撲の中で、ひときわの伝統と歴史を誇るのが五箇大会である。

「昔から、五箇に生まれた男であれば、水若酢の土俵に上がるのが夢でした。大相撲の国技館にも比せられる晴れ舞台なわけです」

こう語る大巾会理事長の永海治さんも、じつは五箇村の北方出身だ。水若酢とは、郡地区に鎮座する隠岐一の宮・水若酢神社のことで、境内の一角には立派な方形造り

の屋根を備えた常設土俵がしつらえられている。古典相撲の三役に選ばれることよりも、五箇大会で優勝することのほうが難しいといわれるぐらい、水若酢の土俵は相撲のメッカとしての誉れが高い。

全島大会である古典相撲の場合、地取りは最低でも一カ月に及ぶが、五箇大会では各地区とも一週間〜十日程度の期間を設ける。大会は、旧五箇村の十二集落を五地区に組み分けし、それらの対抗戦の形をとる。水若酢の秋祭りの余興の意味合いが強いが、同時に各地区の名譽をかけた真剣勝負の側面を併せ持つ。

小路は、先の古典相撲で寄方の正三天関・宇野智博君を送り出した地区。一カ月半ぶりに土俵をのぞくと、積極的に後輩たちの稽古相手を務める宇野君の姿があった。

「古典で先勝ちできなかったのは残念ですが、まだ先がありますから。今後は、正三(役)

出場を支えてくれた地区の皆さんに、少しでも恩返しになることを実践していきたいと思っています」

「古典は人をつくる」としばしば聞かされてきたが、二十四歳の若武者はすでに着実にその第一歩を踏み出している。それにつけ、各地区の地取りはそれぞれの指導者の個性が反映していて、じつに興味深い。小路の前田泰也さんは子供や若い力士のやる気を引き出すのが上手で、地区としてのバックアップ体制の構築にも気を配っている。

南方には、鉄拳も辞さない指導法で知られる高宮昭司さんがいる。しかし、その反発を招きかねない指導の裏には、子供に勝負を伝えるための巧みな計算が秘められており、周囲の信望は厚い。山田地区の指導は、田中井和幸・門脇浩輔さん兄弟が担っている。取り口に対するアドバイスが具体的で、子供たちの評判もすこぶるいい。



五箇大会の華、「化粧まわし争奪試合」で優勝した宇野泰弘君の土俵入り（平成19年大会）

この山田組は代、久見、向ヶ丘との合同チームであり、地取りもこれら地区を巡回する。訪ねたときは代が順番の日で、小さな集会所脇の土俵周りには、早い時間から年輩者や子供が詰めかけていた。

「年に一度の楽しみですから。今夜は、体が動く者は全員、ここにやってくるはずです」年輩者の一人が地区民の思いを代弁する。土俵とはいっても、屋根もなく、低い俵が円を描くだけのじつに簡素なものだ。隠岐

ではほとんどの集落に土俵の備えがあるが、ここまで質素な土俵も珍しい。それでも、普段これといった娯楽のない地区の年輩者たちにとっては、今宵は間違いなく晴れの日、また特別の夜なのである。

北方では地取りのあとの「やこい」に招かれた。古典のときにも何度か加わらせてもらっており、この地区にはすでになじみの顔も多い。北方のやこいは、ほかの地区とは一風変わっている。酒好きで、しかも宴を盛り上げる役者ぞろいであることが、ひとつ。さらに、相撲甚句の達者な世話役や力士が多く、席に着くが早いか彼らの自慢のノドを聞ける楽しみがある。

この日も、大人たちのやこいが始まってほどなく、誰の口からともなく甚句の発句がほとばしり出た。すると、手拍子が一齐に声のあとを追いかけて、座は一瞬にして燃える闘志の坩堝と化した。

♪親のよゝ意見とナスビの花はよゝ

はゝ ぞすこいぞすこい！

千によゝ一つのあのアダもなによゝ

はゝ ぞすこいぞすこい！

歌の文句にはこんな意味深なせりふもあって、心地よい酔いの中で、つい納得している我が身に苦笑する。

大会の前々日が地取りの打ち上げで、休養明けの当日は朝九時からプログラムがスタートする。水若酢の恒例相撲は、力士にとっての晴れ舞台であると同時に、都会に出た五箇出身者が帰省の理由づけにする大事なイベントでもある。実際、盆・正月の帰郷を見送っても、水若酢の相撲大会にだけは帰ってくるという出身者は多い。この日も、土俵下で旧交を温め合う帰省客のほほ笑ましい姿が、境内のあちらこちらで見受けられた。

しかし、五箇大会の醍醐味は、むしろ取組が終了する夕方以降にある。地区ごとの祝勝会はごく形式的なもので、これは集会所などであっさりと済ませる。このあと、五箇の伝統(?)にのっとって、各種目の優勝者の家に三々五々押しかけるのだ。

この夜、北方の田んぼ中の農道は、甚句を高吟して行き交う若者たちの群れで、深更まで足音が絶えることはなかった。

(いいだ たつひ)



連載Ⅲ  
ホスピタリティーの  
手触り51

# 観光と宗教

旅行作家 山口由美

\*\*\*\*\*  
求められる宗教に対する  
ホスピタリティー

マレーシアのペナン、パツーフエリンギビーチのリゾートホテルでは、最近、中東からの旅行者が増えているという。ハネムーンが大挙して押し寄せるシーズンにはまだ時期が早いとのことだったが、ビーチを散歩していると、全身を覆う真っ黒なアバヤに身を包んだ女性と髭をたくわえた男性のカップルを何組も見かけた。

一方、バリ島のヌサドゥアビーチでは、最近、インド人の富裕層ファミリーが、一族郎党で飛行機をチャーターして、海外ウエディングにやってくるという。

同アジアアンリゾートでも、なぜ中東からのハネムーンはマレーシアに行き、インド人ファミリーはバリ島に行くのか。

答えは、宗教である。

マレーシアはイスラム教であり、バリ島はヒンズー教を信じる土地だからだ。食事や習慣に決まり事の多い彼らにとつて、同じ宗教を信じる土地、というのは、何にも増して安心なのだという。

グローバルズの波のなか、「Yokoso! JAPAN」の看板を掲げ、ようやく海外へ観光の門戸を開きつつある日本だが、これらの宗教を信じる旅行者の受け入れとなると、まだまだ未知数なのではないだろうか。

そもそも、現代日本人ほど雑食性の高い人種はない。それゆえか、宗教上、もしくは健康上の理由で「○○が食べられない」という客に対する気遣いが、概して希薄なように思う。例えば、韓国人にはキムチを出そう、欧米人にはパンを出そう、という

足し算の発想はできても、引き算の想像力が及ばない。

私は、かねてから日本の旅館とアフリカのサファリロッジは、一見全く似ても似つかないようできて、実は、独特の決まり事が支配するエキゾチックな宿泊施設として共通するところが多いと考えてきた。例えば、宿泊料金が食事付きであるということも共通点のひとつだろう。

そのサファリロッジに泊まる時、彼らのホスピタリティーとしていつも感心するのが、予約客に「食べられないものはないか」と、しつこいほど、聞いてくることである。質問表には、ただし書きとして、「ハラルミートのご用意は、三週間前にお知らせください」などと書いてある。

イスラム教が豚肉を食べてはいけないのは、よく知られているが、ほかの肉も、刺





ビーチを散歩するイスラム教徒のカップル

殺した肉（ハラールミート）でなければ食べてはいけない戒律がある。サバンの真ん中で、事前にリクエストさえすれば、このハラールミートを用意するというのである。これには、驚くと同時に感心した。雑食性の高い日本人は、一般に「ベジタ

リアン」を自認する人の率は極めて低い。だが、欧米の知識階級では、多くは健康上の理由なのだろうが、「ベジタリアン」の比率が非常に高い。サファリロッジでは、ごく当たり前に、こうした「ベジタリアン」のリクエストにも応えてくれる。

ちなみに、私の夫には、エビ、カニ、貝、イカ、タコといった類にアレルギーがある。彼が世界で最も旅行しにくいのは、日本の旅館である。特に西伊豆、三陸などは、もはや「行くな」と言うに等しい。彼のアレルギーは、そのままユダヤ正教の禁忌（このほか豚など、反芻<sup>はんすう</sup>しない、ひずめの割れていない動物の肉もNG）と共通する。西伊豆や三陸は、ユダヤ正教の人たちにとっても「行くな」と言うに等しい土地なのである。

イスラム教の戒律のひとつに一日五回の礼拝がある。礼拝は、メッカの方角を向いて行う。そのため、マレーシアなどイスラム教国のホテルの客室には、必ずメッカの方角が記してある。たいてい、それは天井にある場合が多いのだが、バツーフエリンギビーチのシャングリ・ラ・ラ

サヤンでは、ライティングデスクの引き出しの中にあつた。

ホテルには、さまざまな宗教の人が泊まる。イスラム教に関する表示が、あまり目立ちすぎても感じが良くないに違いない。引き出しには、インターネットのケーブルやちよつとした文房具が収納してあつて、それらと一緒に「必要ならばご利用ください」とばかりに、控えめに、しかし、抜かりなくメッカの方角は示されていたのだつた。

今のところ、日本を訪れる観光客は、主に仏教や儒教の中国、韓国、台湾、そして主にキリスト教の欧米が主流かと思う。だが、世界は広い。イスラム教やヒンズー教を信じる人々も、次なるビッグマーケットであることは間違いない。これからの観光産業にとって、宗教は不可欠なテーマなのである。

そうした流れに一步先んじて、和モダンの客室内にさりげなくメッカの方角を示し、ハラールミートの用意ができる旅館があつたなら、産油国の富裕層などに人気が出ると思うのだが、どうだろうか。女性が人前で肌を見せるのを厳しく禁ずるイスラム教だが、昨今流行の露天風呂付き客室や貸し切り風呂があれば、心配ないはずだ。

（やまぐち ゆみ）



旅の図書館

# 新着図書紹介

一九六四年の自由化以降、日本人の海外旅行市場は拡大してきた。その背景には、パッケージツアーが出現し、誰もが簡単に海外旅行をすることができるようになったからと言っても過言ではない。しかし、景気後退の影響もあるが、昨今、若者の旅行離れが進み、市場規模そのものが縮小傾向にあるなかで、本来の旅行の魅力を見直す時期にきている。

そうしたなかで、一九三〇年代の国際列車全盛の時代、まさに海外旅行があがれだった時代のぜいたくでのんびりとした車窓風景を文豪の紀行文から読み解きまとめた本が、『**文豪たちの大陸横断鉄道**』（小島英俊著、新潮新書）。夏目漱石、永井荷風、里見弴、林芙美子、横光利一、野上弥生子の六人の作品を中心に、文豪たちが訪れたアジア、欧州、アメリカの紀行文を通じて、当時の旅行事情や汽車旅に言及している個所を抽出し、近代における旅行の魅力と感動を追体験できる貴重な一冊だ。

著者は、「表現力豊かな文豪たちが異国で何を見て、思ったのか、現代と違って飛行機や高速鉄道がない時代、スローテンポな汽車旅があったはず。あるいは今では再現できない、最高に贅沢な時間があったのではないか……」と近代旅行の魅力の一端に迫ろうとしている。

第二章で林芙美子は、一九三一年、欧亜連絡ルートでパリに向かい安着した時のことを次のように述べている。「プロレタリアというハイカラ語をつかう前に、私は長い三等の汽車旅で、随分人のいい貧乏人たちを沢山みすぎて来ました。さて、これから巴里の生活です。お天陽さま、お見捨てなく！ わたしはまだこれから、どこまでも遠く旅を続けるかも知れないのです」。道中、芙美子はシベリア鉄道の三等車では隣のコンパートメントからお茶やトランプに呼ばれたり、ベルリンからは独仏の労働者と同席するなど、二週間の汽車旅だけでも実にいろんな出会いをした。苦勞して育った芙美子は、根っからの貧乏人の生活や気持ちを理解することができたからこそ、出会った人たちに共感し、心の安寧を覚えたと紹介されている。

著者は、「今の海外旅行で、一体機中で何人と親しくなるだろうか」と問いかける。「旅行者は長い道中や向こうでの長い滞在期間中に外国人や同朋に親しく深く接する事になる。そこには苦勞も愛憎も時には退屈もあつたらうが、旅に身を没し、心を浸した事であらう。それだけに旅行での出来事は記憶にも印象にも強く残り、その人の人生にも実に多大な影響を与えた事であらう。また、そこにはお金では買えない

感動があつた。正にこれが近代旅行であつたが……」と紹介する。

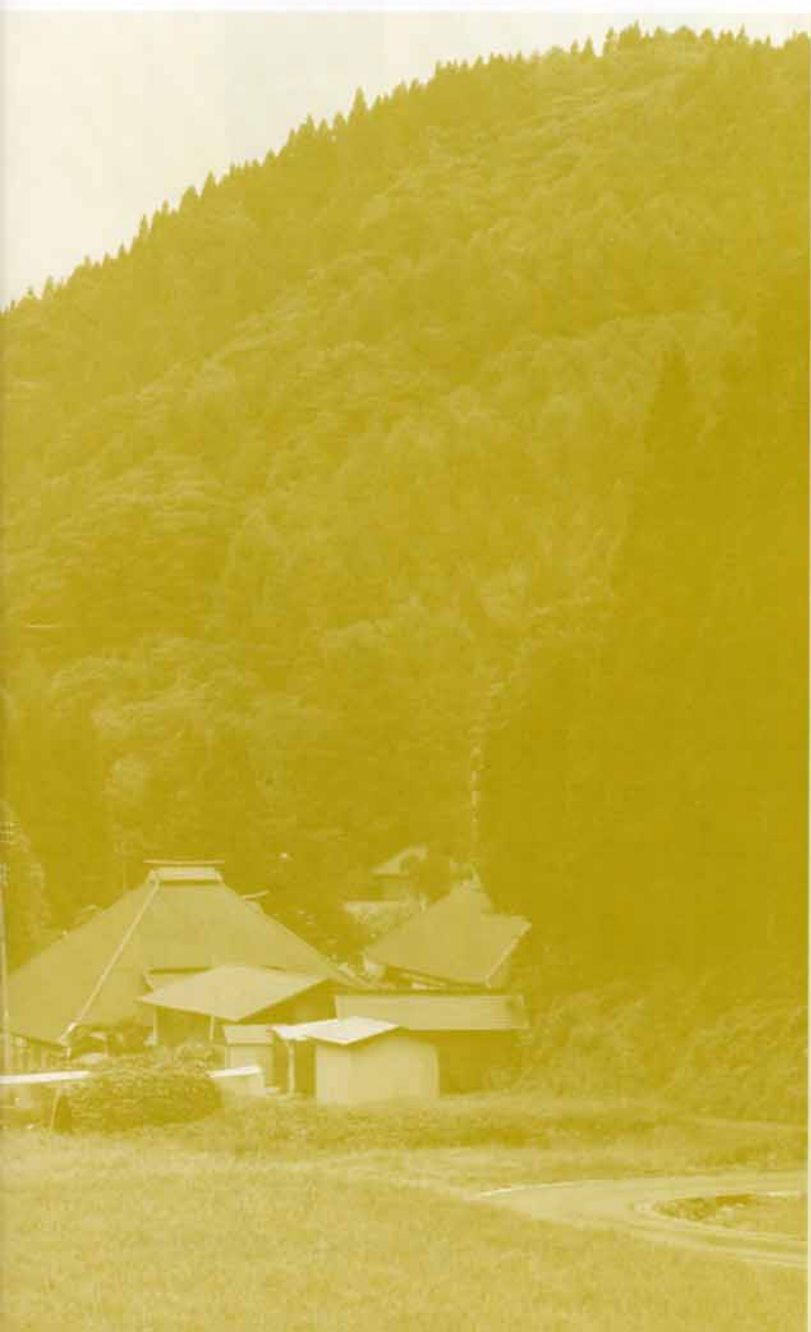
「現代の海外旅行はなんと便利になつた事だらう。(中略) 旅行者のバック旅行のどれかに紛れ込んでしまえば、そのまま連れて行つてくれるのだから。反面一週間で随分効率よくあちこちを廻つて来たのだが、どうも印象が薄く、感動なぞ感じる暇がないといった事が大多数なのではあるまいか。こんな現在を真に恵まれた便利な時代になつたと思うが、それでも何か満たされないものが残つてしまつ」と近代旅行ではふんだんにあつたものが現代旅行で欠落していると、指摘する。

本書の、文豪たちの作品を通して旅本来の魅力に触れることで、現代の旅行スタイルを見直すいい機会となるだらう。旅行離れといわれる時代、幅広い層の方々に一読していただき、旅本来の魅力を広く知ってもらいたいものである。

(江口哲夫)



新書判 223 ページ  
定価 735 円  
新潮社



## 観光文化 第192号

第32巻6号通巻第192号

発行日 2008年11月20日

●  
発行所：財団法人 日本交通公社  
東京都千代田区丸の内 1-8-2  
第1鉄鋼ビル  
〒100-0005 ☎03-5208-4701  
<http://www.jtb.or.jp>

編集室：東京都千代田区丸の内 1-8-2  
第2鉄鋼ビル 旅の図書館内  
〒100-0005 ☎03-3214-6051  
<http://www.jtb.or.jp/library/>

編集人：外川宇八  
発行人：新倉武一

●  
印刷所：JTB印刷株式会社

禁無断転載

ISSN 0385-5554